4月10日のメッセージ

聖書:マルコによる福音書 14: 32-42

「わたしが願うことではなく」

いよいよ十字架への道は最後の一週間となりました。不安と期待がない交ぜになった毎日も、一つの区切りを迎えます。

イエスはゲツセマネというところまで来ると、またも他の弟子たちを置いて、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われます。そして、祈られるのですが、これまでと様子が少し違います。「イエスはひどく恐れてもだえ始め」(マルコによる福音書 14:33)られたというのです。「自分中心ではなく神中心」であることが大切なのは誰もがわかっていることのはずです。しかし、ここでイエスが恐れている姿を見せられるということは、イエスであっても常にそうではないことを教えられているようです。恐れを抱く真の人間としてのイエスの姿があります。

イエスは弟子たちに「目を覚まして」(マルコによる福音書 14:34)いるよう求められました。それは、この不安から、一人にしないでほしいと願われたのでしょうか。それともやはり、祈ることの大切さを教えようとされたからでしょうか。

未来に復活があったとしても、やはり直前になれば、思うこともたくさんあったことでしょう。「この杯をわたしから取りのけて」(マルコによる福音書 14:36)ほしかったのは、自分の命が惜しいというよりはむしろ、弟子たちだけを残していく不安だったのかもしれません。

事実、「目を覚ましているように」と命じられた 3 人は、ものの見事に眠りこけていました(マルコによる福音書 14:37)。それも、二度ならず三度もです(マルコによる福音書 14:41)。もし、救いに与るべき人が「潔白な手と清い心をもつ人」(詩編 24:4)だけならば、彼らがそこに含まれるということはないでしょう。だから、イエスは何度も「同じ言葉で」(マルコによる福音書 14:39)、祈られるのではないでしょうか。

「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マルコによる福音書 14:36) この「御心に適うこと」の中には、イエス自身の十字架と復活のことが祈られているのは間違いありません。それと同時に、神が「全ての人を救う」と願われ、約束されたことが含まれているように思うのです。少なくとも、イエスはそう確信しておられます。

その祈りの内に、二度、三度と同じことを祈り続けられる内に、イエスの確信はさらに強められていきます。「主なる神が助けてくださる」(イザヤ書 50:7)ことは確実だ、と。その祈りの内に、イエスは立ち上がられます(マルコによる福音書 14:42)。一人の人間として、神の子として最後の一歩を踏み出されるのです(「キリストは、……人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」フィリピの信徒への手紙 2:6-8)。逆らうことなく、また、退くことなく(「主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかった。」イザヤ書 50:5)。

もちろん、不安がゼロになったわけではないでしょう。それでも、「わたしが願うことではなく、御

心に適うことが行われますように」(マルコによる 福音書 14:36)とイエスは祈り続けられます。弟子 たちのことを思いながら、私たちのためを思いなが ら、共に祈り続けよう、共に歩み続けようと呼びか けておられます。

「その道に待つ、あなたの不安も、あなたの恐れ も全て私が引き受けよう」。イエスは今日も、私た ちの痛みと不安に寄り添い続けてくださるのです。

